

北海道各地から産出する黒曜石
その10

おくしりちいき

奥尻地域

(Ikutahara Area)

奥尻島の北部にある勝澗(かつま)山のパーライト(真珠岩)鉱床で黒曜石を採取できます。この鉱床は、パーライトと黒曜石で構成され、延長約2.0km、幅500～700mの範囲にわたっており、鉱量は約400万tと概算されています。周辺の地質は、最下部が花崗閃緑岩を主体とする白亜紀花崗岩類、その上部に新第三紀鮮新世末～第四紀前期更新世の堆積物からなる勝澗層、更にその上をおおって前期更新世以降に活動した勝澗山流紋岩に分類されます(秦、1997)。

パーライトは、クリーム色で比較的ち密ですが、特に、溶岩の側方部には発泡の度合いが進み、一部、軽石のようになったパーライトも見られます。黒曜石は、流理構造を呈するパーライトに挟まれるように産出しています。これは噴出後、流動時における溶岩内部の部分的な圧力の減少や含水量や温度、粘性度等の違いによるためと考えられます。

また黒曜石は、半透明をした黒色～灰色のガラス光沢で比較的ち密ですが、冷却時の流動・破壊、収縮・固化、そして再加熱によると考えられる数cm～5cm前後のブロック状となって不規則に割れ易くなっています。割れ面は貝殻状断口を示さず、鋭利な部分はほとんど存在しません。このため、石器の材料には全く適さないと考えられます。国内では3か所で見られます。

先史時代にも奥尻島には人が暮らしており、遺跡からも黒曜石製の石器が見つっていますが、これらの黒曜石は、奥尻組成グループに分類される奥尻産の黒曜石ではなく、他の産地から持ち込まれたものです。

勝澗山では、黒曜石溶岩とパーライト溶岩の漸移部を観察できるので、黒曜石のでき方を見る露頭としては最高の場所でもあります。勝澗山流紋岩は、フィッション・トラック年代により、 $0.2 \pm 0.06 \text{Ma}$ (雁沢、1992)及び $0.31 \pm 0.09 \text{Ma}$ (玉生、1978)の噴出年代が知られ、道内の黒曜石では最も新しい年代に相当します。(学芸員 向井 正幸)



発泡部分は脆くなっている。パーライトと黒曜石が混在。



奥尻島勝間山の黒曜石。このモザイク状は国内では3か所のみ知られている。



巨大な採掘露頭。ここでは流紋岩がパーライトや黒曜石に変化していく様子が見られる。

地学シートHP

ASAHIKAWA
CITY

地学Sheets

Asahikawa City Museum

旭川市博物館HP

